

<メディアウォッチ>

巨人軍の「消せない事実」を指摘した記事と、ほおかぶりした礼賛社説

上出 義樹

朝日新聞の11月4日付スポーツ面で西村欣也編集委員が、3年ぶりに日本一になった巨人軍の「消せない事実」として、一連の不祥事を取り上げている。原辰徳監督が今年6月、「過去の女性問題で、元暴力団関係者らから1億円ゆすられ、支払っていた」ことや、法外な額の新人選手契約金問題である。

日本一になっても1億円事件を免罪しない朝日の西村編集委員

西村編集委員は「反社会的勢力に1億円もの金銭が渡っていたとしたら、重大な野球協約違反だ」と指摘したうえで、この1億円事件や新人契約金問題について、日本プロ野球組織（日本野球機構）の最高責任者である加藤良三コミッショナーが巨人軍などの調査をせず、不問に付したばかりか、「野球に集中してください」と、逆に激励までしていることを改めて批判。今シーズン、見事な勝ち方で獲得した巨人のチャンピオンフラッグの裏には「なかったことに出来ない事実が刻印されている」と、切り込んでいる。

この記事は2段見出しのやや地味な扱いだだったが、今季後半の巨人軍快進撃とともに、うやむやにされてきた感がある問題だけに、日本一になっても決して免罪しない西村編集委員らしい切れ味鋭い指摘には、溜飲が下がる思いがした読者も少なくないのではないかな。

美辞麗句だけが空しく響く読売の社説

案の定、これとは対照的に翌5日付の読売新聞の社説「巨人日本一 プロ野球の面白さ満喫した」は、タイトルからもわかる通り、何の問題もなかったかのように手放しで巨人とプロ野球を礼賛している。巨人が抱える根深い問題にはほおかぶりをして、「若いスター選手の登場」や「侍ジャパンの活躍」など、巨人やプロ野球の活性化を期待する言葉が並ぶ。読売新聞が巨人軍の汚点に触れることができないのは重々承知してはいるが、それにしても、社説の美辞麗句が空々しく響くばかりである。

大手紙の「劣化」と不祥事の中できらりと光るジャーナリズム精神

読売と朝日と言えば、このところ重大な誤報・虚報や写真の取り違え、系列週刊誌の“差別”記事掲載中止など、ともに深刻な不祥事を抱えている。両紙を含めたマスメディアの「劣化」がいろいろ指摘される中で、スポーツ分野を中心にジャーナリズム精神を発揮する西村編集委員の記事は、せめてもの救いである。

(かみで・よしき) 北海道新聞で東京支社政治経済部、シンガポール特派員、編集委員などを担当。現在、フリーランス記者。上智大大学院博士課程（新聞学専攻）在学中。